

慈光寺（比企郡ときがわ町）

慈光寺へ向かう途中に「慈光寺山門跡の板碑群」がある

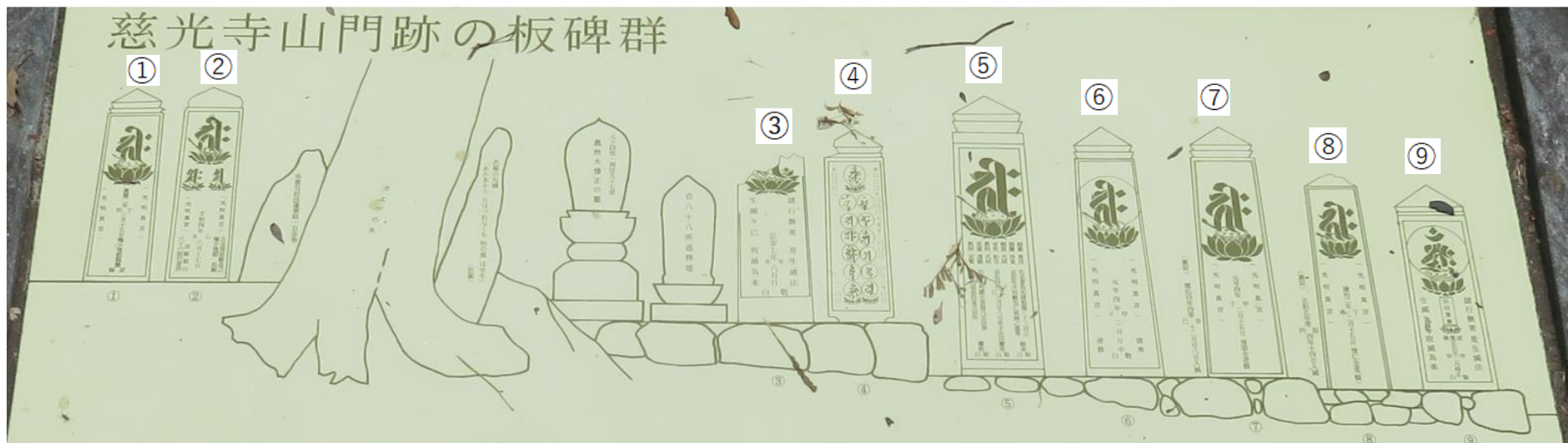
[video](#)



左手から⑤～⑨の板碑



①～⑨の9基の板碑は、鎌倉時代から室町時代にかけて造立された供養塔/③が最も古く、1284年の銘が刻まれている



慈光寺山門跡に立つ9基の板碑は、鎌倉時代から室町時代にかけて造られた供養塔です。表面の大きな梵字は本尊を表し、仏像彫刻と同じように蓮座の上に刻まれています。蓮座の下には年号や願文など造立の目的が刻まれています。

個々の板碑の造立目的をみると、摩滅の進んだ十三仏種子板碑④は判読できませんが、1番大きい貞治4年銘板碑⑤は、慶秀・頼承・慶教の3名が、寺ゆかりの頼憲・専信・頼慶など14名の僧侶の霊を供養するために造立したことがわかります。また、元亨4年銘板碑⑦は朋全という僧侶が自らの死後の往生を願う逆修供養のために造立したことがわかります。これと同様に逆修供養のために造立した板碑が5基①②⑥⑧⑨があります。

この場所は大型板碑が群立する景観として知られていますが、明治時代の初期に山中の僧坊跡から移設したものと考えられています。

なお、板碑の年代および現状の大きさについては、左から順に次のとおりです。

①	嘉暦2年(1327)銘 阿弥陀一尊種子板碑	鎌倉時代	高さ141.0cm	幅40.0cm	厚さ5.5cm
②	文和4年(1355)銘 阿弥陀三尊種子板碑	南北朝時代	高さ137.0cm	幅39.0cm	厚さ5.0cm
③	弘安7年(1284)銘 阿弥陀一尊種子板碑	鎌倉時代	高さ123.0cm	幅42.4cm	厚さ4.5cm
④	十三仏種子板碑(年代不詳)		高さ140.0cm	幅40.4cm	厚さ3.5cm
⑤	貞治4年(1365)銘 阿弥陀一尊種子板碑	南北朝時代	高さ272.0cm	幅65.0cm	厚さ7.0cm
⑥	元亨4年(1324)銘 阿弥陀一尊種子板碑	鎌倉時代	高さ256.0cm	幅64.0cm	厚さ11.0cm
⑦	元亨4年(1324)銘 阿弥陀一尊種子板碑	鎌倉時代	高さ255.0cm	幅65.0cm	厚さ10.7cm
⑧	徳治2年(1307)銘 阿弥陀一尊種子板碑	鎌倉時代	高さ221.0cm	幅56.0cm	厚さ9.0cm
⑨	寛正5年(1464)銘 胎蔵界大日種子板碑	室町時代	高さ218.0cm	幅68.0cm	厚さ7.0cm



江戸時代の絵図によると、この場所には山門(仁玉門)や女人禁制を示す結界がありました。女性は結界を避けて「女人道(にょにんみち)」と呼ばれている西側の尾根道を登り、坂東観音霊場九番札所慈光寺観音堂へと向かいました。

左手を見たところ



右手を見たところ



その道路の反対側には「女人道」の標石が立っていた/ここから山道を進むと慈光寺に行けるようだ



慈光七井」ということで、井戸が七つあるらしい



「慈光七井」を探しながら、慈光寺に向かうことができるようだ



それでは青石塔婆～釈迦堂跡～開山塔～鐘楼～阿弥陀堂（本堂）～観音堂～石段～般若心経堂へと進もう



ここは釈迦堂跡/釈迦堂跡の後方に開山塔の覆堂が見える

 [video](#)



このエリアに釈迦堂が建っていた/説明板が立っている



釈迦堂の右手には蔵王堂が建っていたが、同じく焼失したと記されている

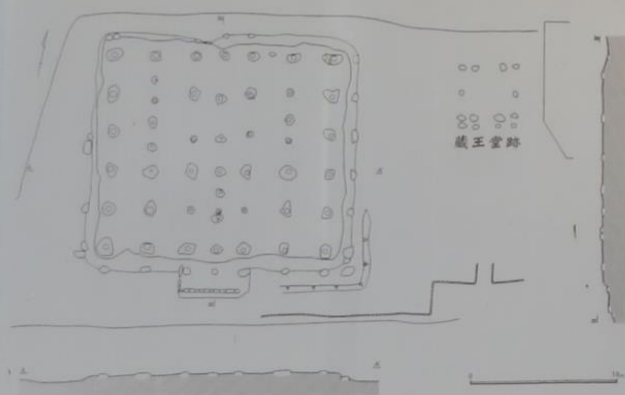
釈迦堂跡

昭和六十年十一月二十六日に焼失した釈迦堂は、元禄八年（一六九五）に奥州津軽の行者、釈見性が諸国を勧化して回り、喜捨された浄財で再建したものである。近年の調査で鰐口に「元禄八年当院四十世学頭翁鎮釈見性法印」とあり、当寺歴代八十四世翁鎮の代に、釈見性の勧進により建立されたことを確認することができた。

間口八間（十四・八メートル）奥行七・五間（十三・八メートル）さらに五尺（一・六五メートル）の外縁をもつ大講堂の内陣には、大講堂にふさわしく高さ二・二六メートルの巨大な釈迦如来坐像が安置されていた。厨子の丸柱に金箔が残っていたことから往時は極彩色であったことがうかがえる。

「慈光寺実録」によると当山には学徒と行徒の二派があり、一夏九十日間行徒は回峰修行し、学徒はこの講堂に閉じこもり論談決釈勤行を行った。寛元の鐘を鳴らしこの堂に全山の僧が集まり内陣は七十五坊の住職、中外陣には修行僧が坐して勤行したと伝えられている。外陣の左右に安置されていた仁王像は、廃仏毀釈により明治末期まで山門にあったがここに移転奉祀されたものである。高さ三・五メートルの巨像で「慈光の仁王様」とよばれ地元々々から親しまれ「仁王奇行」と言う伝説も残されている。

なお、釈迦堂と共に釈迦如来坐像、仁王像、蔵王堂及び蔵王権現立像が焼失した。



釈迦堂跡実測図

平成十七年十二月

都幾川村教育委員会

こちらは開山塔が収められている覆堂

[video](#)



「開山寶塔」と記された扁額が掲げられている/この覆堂の中に慈光寺の開山者・道忠の墓とした開山塔（国の重要文化財）が収められている



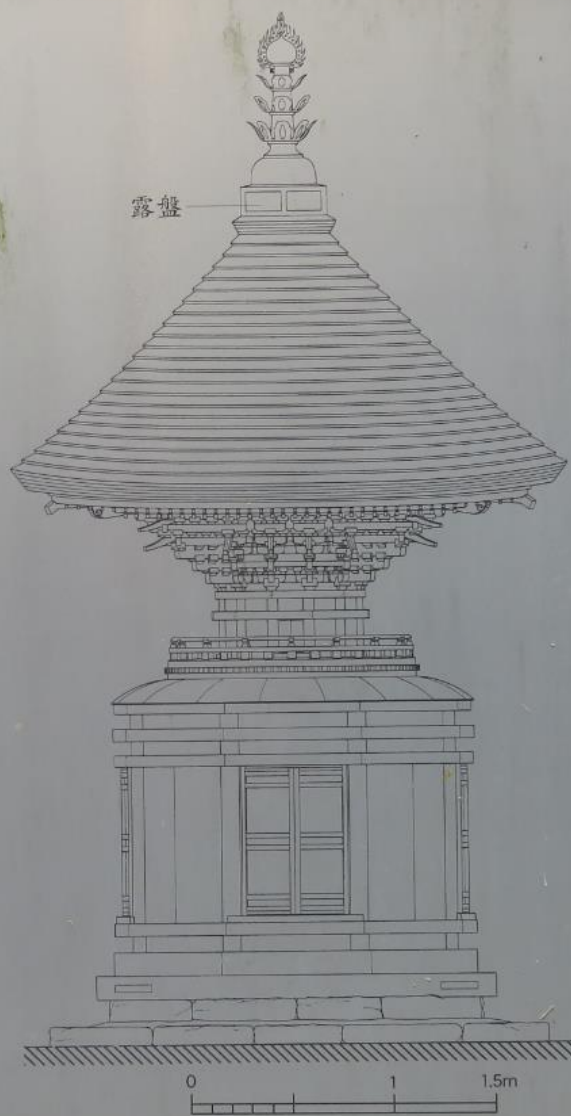
標柱も立っているが、劣化していて良く読めない



国内唯一の室町時代末期の木造宝塔と記されている

国指定重要文化財 慈光寺開山塔 一基

室町時代 天文二十五年(一五五六)
昭和二十八年八月二十九日 指定



慈光寺開山塔は、鑑真の弟子で慈光寺を開山した釈道忠(広恵菩薩)の墓に建てたと伝えられ、正面に見える覆堂の中に収められています。

現在の開山塔は、総高五・一〇メートルの比較的小型の木造宝塔で、室町時代末の天文二十五年(一五五六)の銘が露盤にあったという記録と建築技法により、この頃に建てられたものと考えられています。一階は八角形の土台に八本の円柱を建てて円筒状とし、上端に厚板の亀腹、側面の四方に棧唐戸(扉)を設けています。二階は一階床から立て上げた円形の軸部(中心部)の上部に組物を置き、方形の屋根を支えています。屋根は板で葺いた「とち葺き」で勾配が急になっています。塔の先端にある相輪は欠損していましたが、昭和三十九年の解体修理により復元したものです。なお、この修理の際に、基壇の下から火葬した人骨を納めた須恵器製の蔵骨器や飾り金具など(埼玉県指定文化財)が発見されています。

慈光寺開山塔は、独特の建築技法とともに国内唯一の室町時代の木造宝塔として、極めて貴重な存在であります。

平成十一年三月

都幾川村教育委員会

さて、左手に進むと鐘楼がある



この銅鐘は国の重要文化財/鎌倉時代の鋳造

[video](#)



「寛元の椎鐘」とある



アップで見たところ



国指定重要文化財

寛元三年銘

銅

鐘

一口

鎌倉時代・寛元三年（一二四五）
昭和二十五年八月二十九日指定

この鐘は、鎌倉時代の寛元三年（一二四五）五月十八日に崇朝が願主となって東国の名工「物部重光」が鋳造し、慈光寺に奉納した銅製の梵鐘です。鐘の表面（池の間）には陽鑄による銘文が次のようになっています。

池の間第一区銘文

「奉治鑄 六尺椎鐘一口

天台別院慈光寺

大勸進遍照金剛深慶

善知識入唐沙門妙空

大工物部重光

寛元三年乙丑五月十八日辛亥

願主権律師法橋上人位崇朝」

池の間第四区銘文

「銅一千式百斤」

この銘文によると、鎌倉時代に隆盛を極めていた慈光寺が「天台別院」であったこと。後に鎌倉大仏や鎌倉建長寺の梵鐘（国宝）の製作で知られた「物部重光」が鋳造したこと。臨済禅を日本に伝えた栄西の弟子で、靈山院や群馬県尾島町世良田の長楽寺を開山した「崇朝」が願主として奉納したことがわかります。また、「銅一千式百斤」（約七二〇キログラム）とあり、原料の使用量がわかります。

この鐘は総高一五〇センチ、口径八八センチで、重量は七〇九キログラムあります。年代のわかる梵鐘では埼玉県内最古であり、鎌倉時代から南北朝時代にかけて関東で活躍した物部姓鋳物師の研究や慈光寺の繁栄を物語る貴重な文化財であります。

なお、この鐘楼は昭和六十年十一月二十六日の火災により釈迦堂や蔵王堂とともに焼失しましたが、寺の復興を願う関係者の浄財により平成二年に再建しました。

平成十二年三月

都幾川村教育委員会

さて、そこから阿弥陀堂（本堂）方向に向かうと、屋根が倒壊している/説明板は立っている

[video](#)



その屋根の下には「良寛書 楷書心経」のレプリカが掲示されていたのだが・・・/これはその説明板（素晴らしい解説文だ！）

良寛書 楷書心経

江戸時代 個人蔵

良寛（一七五〇—一八三三）は、ある最も日本的な心を書表現として完成してしまった人だ。だから良寛の心経は、日本人の心経に対する心と、美学を端的に表わしていると言える。この書の内に孕んだ空間が、そのまま外なる空間となる様は、法悦の境であり、心経を唱える人における、「空」や「無明」の知覚との相関に等しく思える。

本書では、「書く」ことの意識から脱却した、書法を超越した良寛の書と、悟りに達した良寛が端座している。

越後に戻った良寛の狂おしいまでの書法猛習を、単なる芸術志向や自己顕示欲の表われと律して良いのだろうか。

想うに良寛は、この書法の猛習によって、備中玉島・円通寺での永く厳しい只管打座の禅定でも得られなかった、真の悟道に達したのではないか。

彼は、ひたぶる書作に邁進し、書によって解脱を期した。良寛は、終にそれを果たし、その超越の書をこうして永遠にすることができた。

解説 飯島 太千雄

（『般若心経秀華』講談社刊より）

平成四年五月

こちらは「空海書 破体心経」の石碑と説明板



空海書 破体心経

平安時代・弘仁十二年(八二二)

広隆寺蔵

空海(七七四―八三五)は、通行の楷・行・草の各体に傑出するのみならず、渡唐して古文・篆隸・雜体と多様な書法を身につけた。この書は、梵字を書くための木筆という、固い刷毛状の筆を用いている。楷・行・草に隸書や章草しょうそうと呼ぶ特殊な書体を混え、しかも梵字の書法で揮毫している。いかにも天才・空海ならではの破体表現により、密教の神秘性と曼荼羅的世界をいかに表わしている。『般若心経秘鍵』を著し、密教としての心経を説いた空海ならではである。悠久三千年の書の歴史にあって、書で宗教を表現し得たのは、一人空海のみである。

解説 飯島 太千雄

(『般若心経秀華』講談社刊より)

平成四年五月

さて、ここが阿弥陀堂（本堂）で、正面はその四足門

 [video](#)



四足門の奥が阿弥陀堂（本堂）



そこで、左手を見たところ



同じく、右手を見たところ



四足門に掲げられた扁額



これは阿弥陀堂（本堂）の唐破風



そこで、左手を見たところ



同じく、右手を見たところ



右手のこの木は多羅葉（たらよう）/埼玉県指定天然記念物



こちらは「時の鐘」



阿弥陀堂（本堂）の左手には、宝物殿がある/ここには国宝の「法華経一品経 阿弥陀経 般若心経三十三卷」が展示されている



さて、次はいよいよ観音堂へと向かうが、これはその途中にある「弘法大師筆 隅寺心経」のレプリカと説明板

[video](#)



路

参拝者のみなさまへ
朱印・納経
御座敷
場所 本堂 (南院裏)
徒歩約三分
午前8時～午後5時
(12時～1時 昼休み)
午前9時～午後4時
(11月～3月 冬季)

右手の経題の下に、貼物があるが・・・

心經

法華

心經

觀自在菩薩行深般若波羅蜜多時照見五
蘊皆空度一切苦厄舍利子色不異空空不
異色色即是空空即是色受想行識亦復如
是舍利子是諸法空相不生不滅不垢不淨
不增不减是故空中无色无受想行識无眼
耳鼻舌身意无色馨香味觸法无眼界乃至
无意識界无无明亦无无明盡乃至无老死
亦无老死盡无苦集滅道无智亦无得以无
所得故菩提薩埵依般若波羅蜜多故心无
罣礙无罣礙故无有恐怖遠離一切顛倒夢
想究竟涅槃三世諸佛依般若波羅蜜多故
得阿耨多羅三藐三菩提故知般若波羅蜜
多是大神呪是大明呪是无上呪是无等等
呪能除一切苦真實不虚故說般若波羅蜜
多呪即說呪曰
揭諦揭諦 波羅揭諦 波羅僧揭諦 菩提薩婆呵
誦此經破十惡五逆九十五種耶道若欲供
養十方諸佛報十方諸佛恩當誦觀世音
若百遍千遍无問晝夜常誦此經

経題の下に貼ってあるのは、江戸時代の鑑定家「古筆家」が空海の書とした極札だと云う

弘法大師筆 隅寺心経

奈良時代 個人蔵

隅寺すみでらとは、奈良の海龍王寺のこと。いつの時か同寺より多くの心経が出現した。そこで若き空海（七七四〜八三五）が、千卷心経を発願した故事から、一括してこれを弘法大師筆の隅寺心経として崇拜されてきた。経題の下に貼ってあるのは江戸時代の鑑定家「古筆家」が空海の書とした極札きわめふだ。だが、同類の一卷に「天平勝宝七年料」（七五五）と奥書があり、その頃のものとされる。筆者も当然複数だが、その筆蹟は極めて優れ、あくまで謹厳、整正、まことに写経の龜鑑となすにふさわしい。日本筆頭の書人・空海を比定するのも、むべなるものがある。

本書の結体はあくまで緊密で、一毫の揺ぎもない。それは、いみじくも筆者の祈りの心に微塵みじんの曇のないことを端的としている。

隅寺心経の中でも、本書は天平写経の名品・光明皇后発願の一切経「五月一日経」に比肩する傑作である。

解説・撮影 飯島太千雄

（『般若心経秀華』講談社刊より）

平成三年五月

その左手には「紺紙金字一字宝塔心経」のレプリカと説明板がある



紺紙に金泥で宝塔を刷り、金泥で書写したものらしい

一若 殿揭揭 咒故等 是知得 世一寻 依無老 無界身 色不 是受不 切蜜觀 摩
稱人 若諦諦 口訛咒 大殿阿 諸切無 殿得死 無乃意 無淨諸 想異若 妙目可
南散 心菩揭 殿能明 若轉佛 眞倒微 波無無 盡無色 想增空 識色舍 照喜若
元乱 經提諦 若除咒 波一 是羅羅 殿夢故 羅所苦 乃意聲 行不 相之 即利 見隆 波
佛心 娑波 波切 無蜜 三若 殿究 有少 故減 無界 味無 是生 如空 皆深 蜜
鉢八 哥揭 察若 上少 舊波 究有 少故 減無 界味 無是 生如 空皆 深蜜
以於 諦波 咒真 咒是 三羅 竟怨 故菩 道老 無單 眼故 不是 是空 皆深 蜜
成塔 波 咒寶 是七 摩提 提心 提無 死無 法耳 空減 舍即 異空 若
佛廟 羅 即不 神提 膝遠 無隆 智之 明無 鼻中 不利 是空 度波 經
道中 樓 訛處 等咒 故故 三離 墨之 無之 膠舌 無垢 子色 空一 羅

紺紙金字一字宝塔心経

平安時代後期 唐招提寺蔵

紺紙に銀泥で宝塔を刷り、金泥で書写するが、なかなかの能書で、和様経のよき範となろう。宝塔・書風・異体字からして平安末期の書写と思う。当時、法華経の一品経に阿弥陀経と心経を加えた願経が盛行したので、その一具と考えられるが、精査すると宝塔が木版刷りであり、これにより、本書は心経を十巻または百巻、五百巻を一具とした願経であった可能性もでてきた。鎌倉時代以降に金泥で嚴重な莊嚴を四囲に加えていることからして、高名な貴紳の題経であったのだろう。日本では、平安時代後期に法華経信仰が隆盛し、こうした一字を法塔や蓮台の中を書く裝嚴経がかなり書写されたが、心経の遺例は管見に及ばない。また、尾題の後に法華経方便品の一節を加えている点も稀有の例である。

解説・撮影 飯島 太千雄

（『般若心経秀華』講談社刊より）

慈光寺を創建した道忠和尚は、この心経を所蔵される唐招提寺の開山、かんじん かつじょう 鑒眞和上（六八〇～七三三）の高弟であります。鑒眞和上は、来日のため東支那海を渡らんとして、五度の海難漂流に遭遇され、幾多の艱難辛苦の中に失明されても、初志をまげず、十一年後の天平勝宝五年（七五三）ようよう日本上陸を果されました。和上は、東大寺に戒壇を設け、律宗を興すなど、佛法興隆に尽されると共に、たずさえてきた佛像、經典と深い学殖は、天平文化に多大な影響を与えました。

平成三年（一九九一）八月、慈光寺百七世明了和尚は、鑒眞和上の遺徳を敬慕し、一世道忠和尚との佛縁浅からぬを深謝して、これと同じ金字一字宝塔心経陶板を、唐招提寺に献上致しました。

平成三年八月

前方に観音堂が見えてきた

 [video](#)



これが慈光寺観音堂/1803年再建/平成5年～平成9年に改修・修復が行われているが、安田工務店が携わっているようだ



こちらは観音堂への本来のアプローチである石段の登り口/この石段を登り切った所に観音堂が所在する



石段を登り切ると、向拝の唐破風が目に飛び込んでくる

 [video](#)



向拝の先が外陣で、吹き放しの空間となっている



「観音堂」の扁額が掲げられている/格子で区切られた中が内陣



都幾川村指定文化財

慈光寺観音堂

一棟

江戸時代・享和三年(一八〇三)
平成元年四月十一日指定
平成九年四月十二日修復

坂東三十三観音霊場第九番札所都幾山慈光寺観音堂の本尊は木造千手観音立像です。寺伝によれば、天武天皇二年(六七三)に僧慈訓により創建されたといわれます。

現在の観音堂は、享和三年(一八〇三)に九十七世義然が再建したのですが、歳月の中で老朽化は進み将来への継承が心配されていきました。そのため修復事業に着手し、村内外からの寄付金、県・村などの補助金と慈光寺により平成五年度から四か年をかけ、本尊の解体修理や茅葺きから銅板葺きへの改修、堂内外の修復と周辺整備を行いました。

観音堂は、入母屋造・銅板葺きの屋根、軒は二重繫垂木とし、本尊を安置する内陣の柱は円柱で三間(約五・四メートル)四面です。前方に十二尺三寸(約三・七メートル)出して礼拝の間(外陣)を設け、その前方には一間の軒唐破風付きの向拝を出しています。外陣は吹き放しで、履物のまま昇殿できる様式は札所建築の特徴でもあります。さらに細部を見ると、柱ごとに彫刻木鼻をつけ、虹梁に細かい文様の地彫または彫刻を施し、その上は彫刻欄間で飾っています。内陣は格天井とし紋尽くしの文様を画き、来迎柱には極彩色が施されています。なお、外陣に千手観音の眷属である風神・雷神をはじめ二十八部衆の欄間彫刻があることは特徴でもあります。

本尊千手観音立像は秘仏ですが、毎年四月第二日曜日と十七日に厨子が開かれ拝観することができ、この御開帳日には多くの信者が登山し、盛大に護摩法要が行われ賑わいます。また季節を通じ全国から多くの巡礼者の参詣が絶えません。

堂内には廃絶した山内諸堂から木造十一面観音立像・木造毘沙門天立像が合祀され、外陣には賓頭盧尊者坐像、その天井には伝説の「夜荒らしの名馬」が安置されています。

埼玉県指定文化財

本尊 木造千手観音立像
像高 二七〇センチメートル
頭部 室町時代・天文十八年(一五四九)制作
体部 江戸時代・享和二年(一八〇二)制作



平成十二年十二月

都幾川村教育委員会

向拝の屋根下を左手から見たところ/海老虹梁や手挟み・木鼻の状況



大屋根左手の軒下を見たところ/軒は二重繁垂木/組物は三手先斗拱となっている



細かい文様の地彫りまたは彫刻が施された虹梁やその上の彫刻欄間が、いかにも江戸時代らしい/左手には賓頭蘆尊者坐像が安置されている



外陣の格天井と伝説の「夜荒らしの名馬」



外陣の組物は二手先斗拱



大屋根右手の軒下を見たところ



向拝の屋根下を右手から見たところ/向拝柱には文様が刻まれている



外陣部分を右手から見たところ/外陣は吹き放しで、履物のまま昇殿できる様式となっており、札所建築の特徴という

[video](#)



さて、ここは石段の登り口で、看板が立っている/左手に進むと東関東初の禅寺である霊山院が所在するようだが、右手の般若心経堂を目指す



右手を見ると板碑が立っていた



その更に右手には「慈光七井」の一つ、「閼伽の井」があった

[video](#)



さて、ここが般若心経堂



堂内には日本三大装飾経の一つで、慈光寺経と言われる国宝の法華経一品経の陶板レプリカ「法華経一品経 授記品第六」が展示されている



これはその近くにある如意輪観音と説明板



如意輪観音

江戸時代

如意輪観音は、観自在菩薩が、説法する姿を示現したもので、如意宝珠と輪宝をもって衆生を救い願いをかなえる。如意宝珠は、濁水の浄化・衆生に福德を与え、輪宝は悪を破砕・正法の弘通を意味する。

この観音は江戸中期ころから、民間に取り入れられ特に女人信仰が盛んとなり、村々に集落ごとに、このような如意輪観音が、祀られ、二十一夜さまの本尊として残っている。

宝珠と蓮華の代りに、赤子抱いている珍しい悲母観音である。娯楽の少ない昔は、月の二十二日の夜この観音さまの前に女衆が、供物や食べ物を持ち寄り、喜びや悲しみを語り尽くしたという。

この如意輪観音は、地元の雲河原村大字小戸々（現在の都幾川村大字雲河原字小戸々）産出の小戸々石を彫刻したものである。台石の左右に「寛政八丙辰載」孟冬吉祥日（一七九六）當邑講中善男女 発願主 浄土院 浄恵と造立年月日が刻されている。元は浄土院念佛堂跡にあったものである。

合掌

平成五癸酉十二月（一九九三）

都幾山 慈光寺

江戸時代の造立



こちらもその近くにある板碑と説明板



弘長二年弥陀一尊種子板碑

鎌倉時代

この青石板碑は、左衛門尉行直(須黒氏)が、弘長二年三月(一二六二)に慈光寺山内に造立したものです。重忠・秩父六良と追刻されていますが、元久二年六月(一二〇五)に討死した畠山重忠・重保父子を供養されたものと思われます。中央に、「観無量寿経」の偈がある。

光明遍照 光明はあまねく
 十方世界 十方世界を照らし
 念佛衆生 念佛する衆生を
 攝取不捨 攝取して捨てず

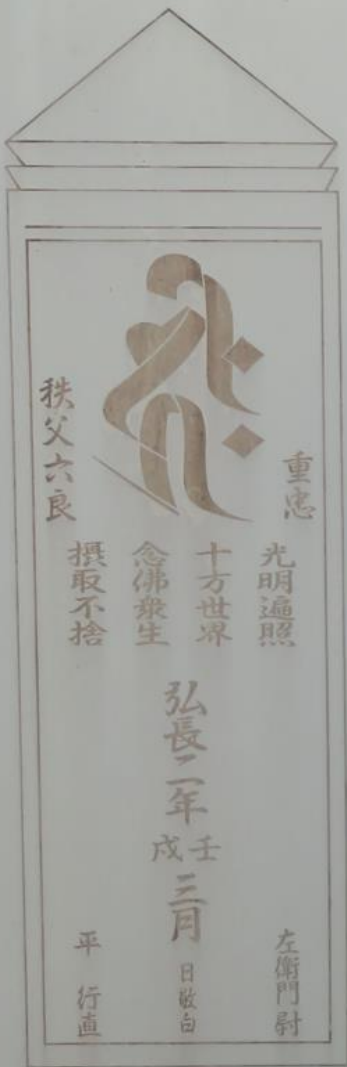
いつのころからか折損倒壊して放置されているのを惜んだ識者の手によって、明治十二年十月(一八七九)に補接されて、その次第を刻した記念碑「修建畠山重忠君断碑記」と共に浄土院境内に移されました。その後再び折損したので貴重な文化財が散逸してはと、宝蔵軒下に大切に保管されていました。

このたび、檀主渡瀬全平氏の佛縁により、板碑と同じ石質の小川町下里産の緑泥片岩(高さ三メートル、幅〇・六、厚さ〇・二)を用い象嵌仕上げの手法をもって、復元されたものです。

合掌

平成五年癸酉五月(一九九三)

天台別院一乗法華院
都幾山 慈光寺



畠山重忠・重保父子を供養する碑とのこと



これは釈迦堂近くから下界を見下ろしたところ



参考ホームページ

<https://www.temple.or.jp/map>

<https://blog.goo.ne.jp/hanako1033/e/717a4d2eacdf195973b2c629685f8502>

<https://www.yokogoto.net/travel/14963.html>

<https://www.photo-saitama.jp/temple/bando/bando-09.html>

<https://www.town.tokigawa.lg.jp/div/301010/pdf/bunkazai/iikouji.pdf#search=%27%E6%85%88%E5%85%89%E5%AF%BA%E8%A6%B3%E9%9F%B3%E5%A0%82%27>

<https://ameblo.jp/tweet-tweeties/entry-12437171598.html>

<http://xxion504kanda.jp/blog-entry-1581.html>

<https://4travel.jp/travelogue/11594907>

